無災害記録を持続するために

付知営林署　　山　口　　太

安全は家庭の和から職場の和へと連ながり、これらの和が基盤となって、安全が保たれ円滑に進行する。我が事業所は53年9月以降無災害を続けており、この記録が署全体の無災害に連ながり2年余の長きにわたっている。我が職場では、この記録を汚すことのないよう取組んでおる。人間働くということ程大事なことはない。休日等が続いた後は身体もだるく働く意欲も若干は減少する。だが出勤し懸命に働くと体調も整のい朝の身体のだるさも発散して、1日働いて帰宅する時は汗と努力の結晶が満足を与えてくれる。働く者は生きている限り働くのだ。そして汗を流すのだ。山奥で働く我々は1日の安全を願って家を立ち、また妻子も皆、安全を願って毎朝送り出してくれる。見送られる我々も妻子の願いを背負い今日も1日安全を願って働く、職場の1日は晴れた日、また雨の日と天候に左右され千差万別で下界では想像のできない事柄が数知れない程ある。山の気象条件は変りやすい。だが濃霧または雨天でもその日のうちに片付けなければならない仕事がある。その時はお互いを信頼し、合図、信号等を確認しつつ、お互いに励まし合い連携を保ち実行する時のすばらしさは他の職場では味わえないものがある。働く私達は無災害を推進して行くことは、金よりもまた宝よりも、掛替えのないものである。いつまでも安全の二字を合言葉に懸命に努力し、53年9月より続けている無災害の金字塔を汚すことなく誇りをもって、毎日を一歩一歩積み重ねて行く事が我が事業所のモットーである。だが事故はいつ発生するのか無知のもので、職員1人ひとりが無災害を続けていくことが我々に与えられた任務と考えている。

現場での作業は並たいていの作業ではない。特に生産事業は、種々多様で、伐倒、架設、集材、造材とどれを見ても危険な作業である。特に天然林における伐倒作業は、4年、5年否、10年以上の経験が要求され職人並の技術が必要とされる。1本の木を伐倒するにも全神経を集中し、実行しなければならない。裏木曽のヒノキは天然記念物並みで価格とすれば1本百万円もする木が立っている。この高価なヒノキを伐倒するには、まず安全を確認し、周囲上方等の指差確認を実施し、伐倒する方向と技術によって百万円の木は百万円の価値となる。採材においては、製材業者の立場にたった気持で高品質材生産向上に努めている。班の中では年令差があり、50代から30代と年の開きがあり、また顔形の異なるとおり気性もちがい、1人ひとりの気性からまた体格に合せて適材適所に合った作業を実施している。人にはそれぞれの特技があってそれに連ながる人員配置を行うとともに、個人の身体の調子等その人の要件を聞きそれに合った業務に配置をする。我々仲間は20年いや30年とつき合った長い長い友達であり、自分の妻よりも前に知り合った仲間ばかりである。だからひと目見れば、その日の身体の具合がよくわかる。1日安全に作業するにはまず家庭の和であり、朝家を出る前に妻と

口論したり、また家庭の中に心配事があると、安全な仕事は出来ない。25年前友達と野球を見に行き午前3時頃帰宅し、寝る間もなく現場へ行き睡眠不足で作業し高所から落ち3週間の公務災害をした事がある。原因は寝不足と疲労であった。それから早寝・早起きする事を徹底しており、これが安全確保の第一である。今から10数年前、我々の現場の家族見学が催され、母親、妻子達が作業を見てくれた。その時の家族の話は、「あんな場の悪い山で危険な仕事をしているとは知らなかった」「家に百姓があるけど、あの山の現場やお前の仕事ぶりを見たら、土曜、日曜日は百姓をしてくれなくててよい」「休んでまた月火水木と径我をしないよう働いて来れ」、これが一番の金の金だと言ってくれた。それからは家族に甘えた訳ではないが土曜、日曜はゆっくりと自分のすきな事をして休み、現在も白ロウ病にもならず、チェンソーマンとして元気に働いている。私ごとであるが、安全は早く寝ること、白ロウ病にならないことは身体を冷さないこと、土曜、日曜は家でゆっくり休むこと、私はこれをモットーにしている。

私達の事業所は、夏山は天然林、冬山は人工林と180度の転換である。全国的に見ても冬山事業で重大災害が多く発生している。原因は、寒さ・積雪、きぶくれ、また人工林といって安易な気持で作業するためではないかと思われる。生産は攻撃であり、安全は守備である。生産と安全の両輪を円滑に始動するため、一言運動、「オイ気をつけてやろう」「今日は元気かよ」とお互いに肩をたたき合い気持を結び合う事が、積み重ねになり安全活動の要因であると考える。安全で1日の作業を終え家に一歩足をふみ入れた時の気持は言葉で表わせないものが実感として湧いてくる。食卓を囲み1日の出来事に花の咲くのもこの喜びがあってこそである。我々職員は、注意する気持、径我をしない自覚、を根底に持って安全確保と生産性向上に今後も努めてゆきたいと考えている。